完璧なくさかんむり

西村明人

藤井先生.

先生の何を存じ上げていたのかといま改めて問うてみると，いささか心許無いものがあります．1973年の学部入学以来，公私にわたってこれほどお世話になっておりながら，あれもこれも，何も知らないという領分があまりにも多いのです．教え子といえども無闇には意見されない先生の礼節を尊ぶご厚情に対し，敢えてこちらから先生のほうに一歩でも踏み込もうとしないで自分では控え目と信じていたのは，自分から敢えて知ろうとしないで済ました横着というものであったかも知れません．知ろうとして知ることのできるもの，知ろうとしても知ることもできないもの．いずれ知ることのできなかった部分のほうが圧倒的というものでしょうが，こんな相手に，実は食い足りなさを感じておられたかどうか．もはや今，この場でやり直せるものではありませんし，しかも，このような文を書く形ではなおさらです．不相応は承知で，しかし，いまは思いつくままに書くことしかできません．

いったいどれだけの思い出があれば，突然，無造作に人を人から断つ力を超えて，人と人を繋いで余るものか，ごく些細な，取るに足らない切れ切れの断片のようでも，案外に思い出から去ろうとしません．とりわけ，先生の御指導を受けた大学院時代の一こまには自分のことながら苦笑を禁じ得ません．

当時，先生に論文の原稿を見ていただいて，実にこと細かく漢字の間違いや句読点の不適切な打ち方を指摘され，論旨やドイツ語の読解ならともかく（などと本気で思えたことがすでに不明の限りですが），このような点でとやかく言われるのは心外であると内心思ったことがありました．有り体にいえば，このような点の間違いを指摘されることに専らこだわりを

感じること自体，ドイツ語以前，論文以前の意識のあり方でしたが．

「きみの『落』という字は，くさかんむりの下にさんずいが充分に入っていないね．書くときの癖なのかな」

と，指摘されたのには参りました．その年齢になるまでだれからも指摘されたことのないことだっただけに，大いにショックでした．年相応の漢字を使えるようになっても，何かの拍子に漢字の筆順の誤りに気づくことがあります．これを意識的に矯正したりすると，その字を書くたびに何ほどかの躊躇を感じるのですが，それから後は『落』という字を書くたびに同じようなことが起こるようになりました．ためらいといっても，書いた後からそれと感じられるほどのもの，しかし，ごくありふれた何でもない字だけに，妙にこのことが印象に残っているのです．

先生の研究室で，Frank Thieß の ≫*Tsushima*≪ を読んだことがありました．対馬沖でのいわゆる日本海海戦を決戦に至る過程から克明に追った年代記的長篇です．当時は作者 Thieß の名前を聞いたこともなく，第二次大戦後に亡命者 Thomas Mann と大論争を展開した当の相手のひとりだと気づいたのは，ドイツの亡命文学に関心を持ちだしたごく最近のことです．読み始める前に，作者について何か先生から紹介があったはずですが，残念なことに何も記憶に残っていません．

先生は，ときどき机の上においた小さめのノートに目をやりながら（びっしりと書かれた字はこちら側からは何が書いてあるか読み取れませんでした）≫*Tsushima*≪ を読み進めていかれたのですが，ときには海戦に出てくる様々な船の名や海軍と陸軍の階級の呼び名の違いを楽しそうに解説されていました．自分としては，資料を綿密に駆使したこの長大な作品の題材には興味を引かれましたが，正直なところ，運命論的な叙述のスタイルには閉口して，後から書いたレポートにも何かそのような趣旨のことを書いた覚えがあります．確たる信念もなく大学院に入って，ようやくドイツ語に興味を覚え出したところでもあったので，ドイツ語も日本語の継ぎ接ぎ細工に終始して，苦心惨憺，〖兵〗や〖海〗の訳語をチェックするために何度も『木村・相良』を引いたものです．名詞の場合は，航海や軍事関係の用語といってもそれほどではありませんが，動詞のときには，要を得ない訳に，辞書の記述の最後のほうにある用例を見落としていることを

指摘されたこともありました．いまでも結構はっきりと覚えているのは，〉halten〈 の項で「〖海〗dicht unter Land〜，陸地に接近して航行する」という用例です．〉halten〈 の用例の訳語として「航行する」という部分に引っ掛かったので覚えているのでしょうが，いかに日本語に囚われていたかが良く分かります．

藤井先生．この機会に，本棚から古い『木村・相良』を引っ張り出してきて，〉halten〈 の項を確認してみました．一通り項目に目を通しているうちに，ふと，この動詞は先生のお人柄を良く表わしているように思えてきました．halten——その持続と抑制の相がです．

先生，もう字を書いても『落』のくさかんむりからさんずいが飛び出すようなことはありません．完璧なくさかんむりです．それでも先生は，どこかで目敏くこの文を目にされて，相も変わらず進歩のない，句読点の打ち方も知らない，見当外れのことを書くやつだ，とお笑いになっているのでしょうか．